

図5 気温の鉛直分布(夏の明け方)

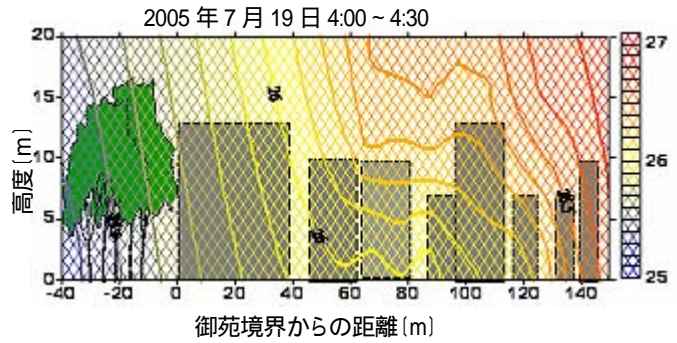


図6 冷気流出の状況(夏の明け方)

### 3. 熱環境の改善に向けた課題と対策の方向性

#### 【都市スケールで取り組むべき課題と対応策】

この地域は、都心部ながら明治神宮、新宿御苑、赤坂御所、神宮外苑などの大規模緑地が連なり、冷熱資源が豊富な地域である。しかし、これらの緑地は現状では建物や道路により分断されており、地域全体としてはこの冷熱資源の効果を十分に活用できていない可能性がある。

既存の小規模な緑地を繋ぐなどして、これらの大規模緑地を有機的に結びつける(図7)ことにより、冷熱を地域全体で活用することが可能となる。このことは景観や生態系の保全の観点からも望ましいと考えられる。

また、現在、蓋掛河川となっている玉川上水・渋谷川を再生することにより、水面面積を増加させることも熱環境の改善に有効と考えられる。その際、河川沿いに親水空間を創出し、都市に生活する人々に憩いの場を提供するなど、水辺を活かしたまちづくりを行い、自然を身近に感じることのできる魅力的な生活環境の形成を図ることが重要である。

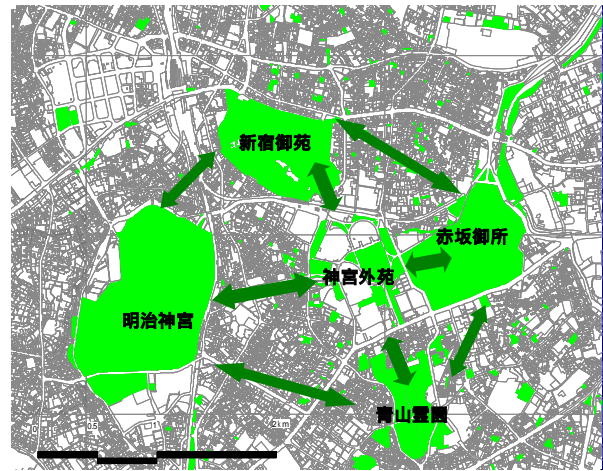


図7 都市スケールでの熱環境改善イメージ  
- 緑のネットワーク化 -

#### 【新宿御苑周辺地区で取り組むべき課題と対応策: 北側地区の例】

御苑では夏季の日中、南からの風が卓越しており、御苑の北側地区は、この風を利用することにより冷熱源としての御苑の恩恵を享受できる可能性の高い地区といえる。しかし、現状では中層建物が立ち並び、冷涼な風を享受できる範囲が限定されるなど、その熱環境的な優位性を十分に活用できていないことが課題である。

そのため、まず御苑からの冷涼な風をより遠くまで運べるような風の通り道を創出することが重要である。現在、北側地区には図8から分かるように緑地がいくつか存在するが、これらの緑地に向け青色矢印のように風の通り道を通すことで、効率的に御苑の冷気を運ぶことが出来ると考えられる。冷熱を暖めることなく誘導するためには、風の通り道に沿った建物や街路の緑化などにより、冷温域を連担させるという手法があるが、さらに冷熱の誘導経路としての機能を強化するため、道の

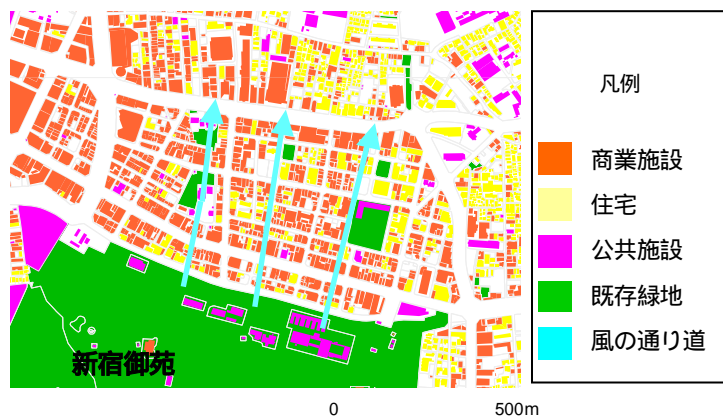


図8 新宿御苑北側地区における熱環境改善の考え方